

令和7年度

第3回 ふるさと常陸太田の歴史散歩

令和7年11月16日(日)

第3回 『幡の里めぐり』



常陸太田まちかど案内人の会

ふるさと常陸太田の歴史散歩

『幡の里めぐり』

日時：令和7年11月16日（日）

はじめに	1
・国造と部について	
・長幡部の地名について	
1. 幡町の遺跡について	2～4
(1) 幡山古墳群	
(2) 機初小学校校庭に移築	
(3) 古墳公園	
(4) 環頭柄頭について	
(5) 幡バツケ横穴墓群	
2. 森東貝塚、築崎貝塚	5
3. 弘法清水	6
4. 長幡部神社	6～8
5. 幡館跡	9
————— 昼食〈機初公民館〉 —————	
6. 幡台古墳群	2

はじめに

この幡の台地の南東側には、森東貝塚、築崎貝塚がみられ、貝類や獣骨などのほかに縄文式土器に混じって弥生式土器・土師器も出土している。

また、環頭柄頭^{かんとうつかがしら}などが出土した幡山古墳群、台地の南側には線刻壁画が現存する横穴古墳群が所在し、里川の流域に広がる幡、小沢、内田の水田には、条里制の遺構が残されている。

「常陸国風土記」には「久慈の地から^{あしぎぬ} 縄を産す」と記されており、そのゆかりの長幡部神社が存在しており、この地は原始・古代の人々の生活の跡がよく残されている地域である。

・国造^{くにのみやつこ}と部^べについて

大和朝廷の地方支配は部や屯倉^{みやけ}の設定、国造制^{くにのみやつこ}の実施などによって整えられていった。五世紀後半から六世紀初頭には、常陸にも国造制が布かれ、新治国造・筑波国造、茨城国造、仲国造、久自国造、高国造、道口岐閉国造^{みちのくちきへ}の七国造があったとされている。久自国造の任命とともに置かれた当地方の部は、君子部、椿戸（橘部）、占部、長幡部、丸子部、大田部、倭文部、大伴部、久米部、八田部、額田部、玉造部、磯部などである。部とは職業による民衆の集団で多種にわたる。農業、漁業、手工業など、それぞれの特殊技能を生かして労働していた。

・長幡部の地名について

久慈の地名の由来や長幡部の機織の関係などについては「常陸国風土記」や「古事記」、「日本書紀」などに記されており、様々な解釈がある。風土記によれば、「長幡部の遠祖多^{たてのみこと}豆命は、三野（美濃）を去って久慈に移り、機殿を造り立てて初めてこれを織った」（大意）とあり、長幡部一族は、美濃国から幡に来て縄を織った部民であることがわかる。

参考資料：『常陸太田の歴史散歩』より

※常陸国風土記…奈良時代初期 和銅6年（713）に編纂され、養老5年（721）に成立した常陸国（現在の茨城県の大部分）の地誌。

Ⅰ 幡町の遺跡について

□ 幡山遺跡（縄文～古墳時代）

□ 幡台遺跡（縄文～奈良・平安時代）

■ 幡山古墳群 ①幡山北横穴墓群 ②幡山西横穴墓群 ③幡山東横穴墓群

④幡バツケ横穴墓群

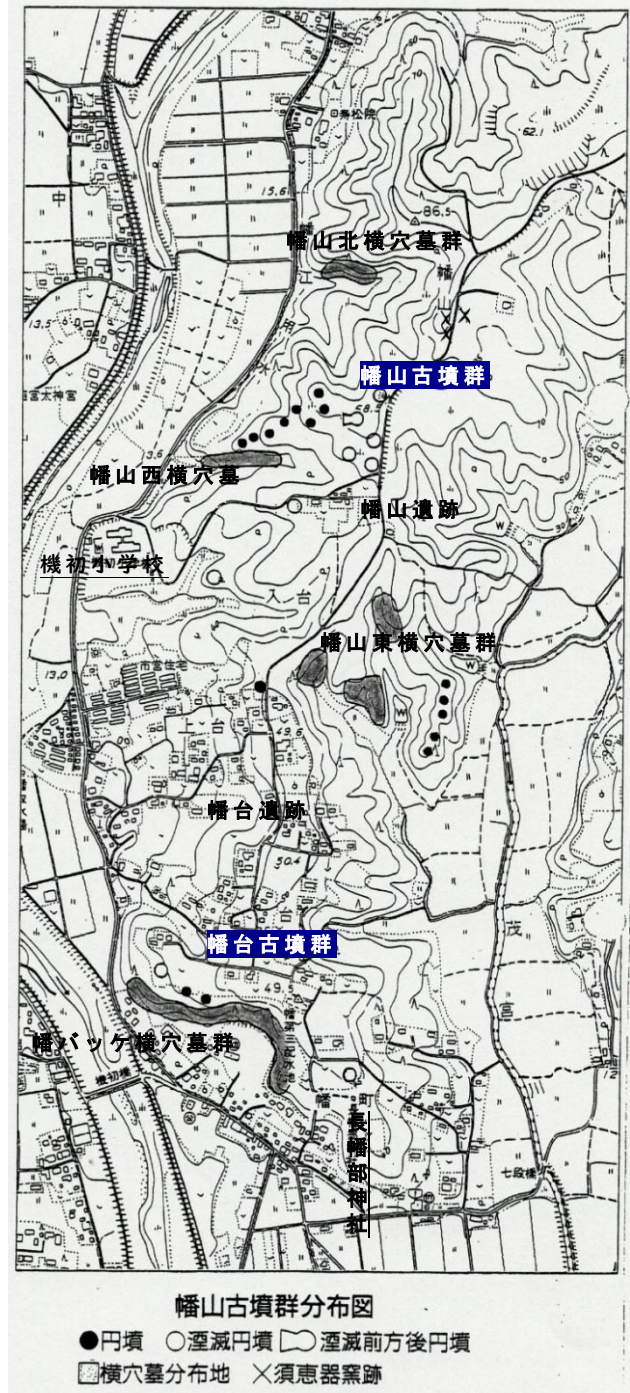
■ 幡台古墳群（円墳3基、方墳1基）

（Ⅰ）幡山古墳群

常陸太田市街地の北東約2km、南北にのびる台地上に幡山古墳群はあり、台地上の高塚墳と台地斜面にある横穴群とから構成されている。台地上の高塚墳は前方後円墳1基をはじめ、約25基の古墳が点在していたが、そのほとんどが発掘調査前に盗掘や開墾によって原型が失われていた。

発掘調査においては、環頭柄頭や玉類、埴輪等の遺物が出土しているとともに、縄文・弥生時代の遺物も数多く確認されており、幡山の台地には古くから人間がくらししていたことがうかがえる。

横穴群は台地の東・南・西斜面に確認されており、総数は200基を超えるものと思われる。南斜面の横穴群はバツケ横穴群と呼ばれ101基が確認され、水鳥や人物、船などの線刻壁画のある横穴も2基含まれている。東斜面にある横穴群の発掘調査においては、3群55基の横穴の調査が行われ、数多くの須恵器や玉類が出土している。また、古墳群の北端には須恵器窯跡3基が確認されている。県内において須恵器窯跡の発見は少なく、中でも幡山の須恵器窯跡は7世紀後半といった古い時代の窯跡と考えられている。



(2) 機初小学校校庭に移築

古墳の石室 2基(12号墳、16号墳)が移築されている。12号墳の規模は、東西15m、南北14m、高さ2.5mの円墳で、石室は両袖型の横穴式石室である。また、16号墳は直径20m、高さ2.5mの円墳で、石室は南に羨道をもつ無袖式の横穴式石室である。



(3) 古墳公園

円墳5基(20号墳、21号墳、22号墳、23号墳、24号墳)が機初団地の南東部に古墳公園として永久保存されている。

	直径	高さ
20号墳	17m	1.3m
21号墳	25m	1.4m
22号墳	15m	1.5m
23号墳	15m	1.3m
24号墳	19m	1.8m



(4) 環頭柄頭かんとうつかがしらについて

昭和41年8月に実施された発掘調査によって、9号墳より環頭柄頭かんとうつかがしらが出土した。9号墳は直径約15メートル、高さ約2.5メートルの円墳で、墳頂部には盗掘のあとがあり、横穴式石室内部が露出していた。環頭柄頭は、古墳時代の刀剣の柄の先端部



につけた装飾性のある柄頭で、全長7.7センチメートル、環頭部の外径は縦5.2センチメートル、横6.7センチメートルで、環内には「くちばしをややあけ玉をくわえた鳳凰の首」が彫られている。頭上かんもうには三本の冠毛や角状の後毛を表現している。こうもう(昭和42・8・31市指定)

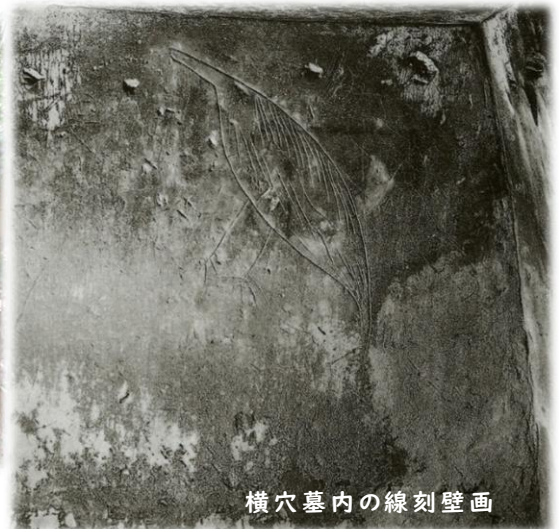
参考資料：『常陸太田市教育委員会文化課資料』より

(5) 幡バツケ横穴墓群

この横穴群は、元機初小学校の西側の山道をはさんで東西に分布しており、この道の東側に存在する横穴を東地区横穴群、西側に存在する横穴を西地区横穴群と分けている。横穴は、東地区に31基、西地区に70基が確認されており、西地区の横穴は、斜面にほぼ三段に掘られている。昭和28年(1953)に、東地区の6号、11号、12号の3基が調査され、6号と11号から線刻壁画が確認された。壁画は、鳥類を主とした竜頭、人物顔などが描かれている。出土品は、11号横穴から土師器の坏と金環1個が出土している。昭和42年には、西地区のA号・B号(仮称)、14号横穴の調査が行われた。全長は6~7メートル、立面形はいずれもドーム状を呈し、玄室の床面には礫がしかれており、排水溝が設けられていた。出土遺物は、A号から須恵器、人骨、人歯、B号から須恵器提瓶、土師器皿、坏、人骨など、14号から切子玉、直刀、鉄鏃などが出土している。横穴の形式や副葬品から6世紀の後半から7世紀はじめ、一部は8世紀にも利用されたものと思われる。横穴古墳群は、県下でも県北に多く存在しているが、一か所に100基以上も密集していることは珍しく、また壁画が描かれており装飾古墳の研究上も大変貴重なものであり市指定史跡としている。(昭和42・8・31指定)



横穴墓群の一部



横穴墓内の線刻壁画

参考資料：『常陸太田の文化財』より

2 森東貝塚、築崎貝塚

森東貝塚は幡町森東に所在し、幡台地先端部の長幡部神社東傾斜面（標高約35m、水田との比高は25mほど）に形成された貝塚で貝は径10mほどの範囲に散布している。

昭和25年、水戸二高歴史クラブが部分的に発掘調査を実施、その後昭和54年に、市史編さんのため発掘調査が実施された。この調査結果によると、土と貝が混在した混土貝塚で、ヤマトシジミが主でハマグリなどが発見され、イノシシ・シカなどの骨も出土している。土器は、縄文前期の土器がもっとも多く出土しているが、弥生式土器、土師器も出土している。



森東貝塚付近

築崎貝塚（森東B貝塚ともいわれる）は、昭和43年11月に畑耕作中に貝層が露出したため、太田一高史学会が応急的な調査をした。その後、昭和54年に森東貝塚の発掘調査にあわせて調査が行われた。その調査結果によると、ヤマトシジミが主で、アカニシ・ハマグリ・カキなど、魚類はスズキ・クロダイ、鳥類はカモ類、哺乳類はイノシシ・シカなどの骨が出土している。土器は、縄文時代早期・前期、弥生式土器、土師器が出土している。

森東貝塚・築崎貝塚は、出土した土器類から縄文時代前期（7～6000年前）の貝塚であると考えられる。縄文時代前期には、現在の水田面まで海水が流入していたことがわかる。また、貝類や魚骨、鳥・哺乳類などの骨類が出土したことによって、当時の人々の食生活の一端をうかがうことができる。



築崎貝塚・森東貝塚付近

参考資料：『常陸太田市史』『常陸太田市史余談百話集』より

3 弘法清水

幡町森東に「弘法清水」という清らかな水のわく泉がある。長幡部神社から東へ約100mのところにある。そこに岩をくりぬいた2つの井戸が、約3～4m間隔で存在している。むかし真夏の暑い日に、みすばらしい姿をした旅僧が、この近くを通りかかった農家に水を求めた。この年はあいにく日照り続きのため水不足で、どこの家でも水を大切にしていたので、快く飲ませてくれようとしなかった。そこで次々に水乞いをして、村はずれの農家にきた。その農家は、お千代という娘が病気の老母を世話して細々と暮らしを立てている貧しい家であった。このお千代もいったんは断ったが、あまりにも気の毒に思っ、茶わんになみなみと水を盛って、この僧に捧げた。この僧は大変に喜び、「お礼をしましょう」といって、手に持っていた杖で庭の隅を突くと、きれいな水がわき出した。それ以来、どんなに日照りが続いても、お千代の家の井戸だけはかれたことがなかったという。この僧は諸国行脚の弘法大師であったと伝えられている。そして、この家の清水は弘法清水と伝えられている。

また、このあたりでは、弘法大師のような偉い人はみすばらしい姿をしてやってくるので、どのような姿の人がやってきても親切にしなければならないと言われている。

参考資料：『常陸太田市史』『常陸太田市史余談百話集』より

4 長幡部神社

御祭神 かむはたひめのみこと 綺日女命 たてのみこと 多呂命

『「常陸風土記」に次の如く記されている。

郡の東七里、太田郷に長幡部の社がある。古老がいうには、珠売美万命（瓊瓊杵命）が天から降ってきたとき、御服を織るために従って降った綺日女命は、もと筑紫の国の日向の二神の峰より、三野（美濃）国の引津根の丘にやってきた。後、美麻貴天皇（崇神天皇）の世に、長幡部の遠祖多呂命は三野を去って久慈に移り、機殿造り立て、初めて織った。この織るところの布は、ひとりでに衣装となり、あらためて裁ち縫う必要がない。これを内幡といっている。また、紬（太絹）を織るときに、容易に人に見られてしまうので、家のとびらを閉じきって暗くして織るので「烏織」と名づけたといわれている。強い兵士で鋭い利剣でも裁ちきることができない。今は、毎年別に神調として献納している。』とあり、誠に御由緒深い古社である。

すなわち、長幡は絹織物の一種・紵を指すことばで、長幡部とはそれを織る技術者集団をあらわし、御祭神の子孫がその遠祖祀ったのが長幡部神社である。

長幡部神社の神階：仁寿元年（851）正六位上 明応10年（1501）正三位
延喜5年（905）醍醐天皇の命により延喜の核が制定、908年に左大臣藤原時平等によって施行され、延喜の制式内に列し常陸28社の一つに数えられた。（久慈郡には7社、常陸太田には、長幡部神社（幡町）、薩都神社（里野宮町）、天志良波神社（白羽町）、稲村神社（天神林町）の4社がある。）

中世以降、小幡足明神、後に駒形明神といい、康平年中（1058～1065）、源頼義奥州征討の際に戦勝を祈願し、凱旋におよび社地に鹿島、三島、明神、若宮八幡の四所を祀り四所明神とした。以後四所明神は盛大となり鹿島明神となった。

延享年間（1744～1747）古老の口碑によって旧社号に復活したと伝えられる。

江戸時代は水戸藩代々の崇敬が厚く、特に9代藩主斉昭公は深く崇敬し、弓二張（長3尺）・矢10本（長3尺）、刀剣を奉納した。

神社の北五町あまりのところに旧宮跡があり、神輿出社の際に必ず安置した。明治6年に郷社に列格する。当社は、関東に名が広がっている結城紵をはじめ、紵織物の原点の御社であり、機祖神として仰がれている。



参考資料：『長幡部神社御由緒』より

長幡部神社 本殿

- ① 千木 左右各1 ② 鯉木 3本



① 千木とは、神社の本殿の棟の両端でX字型に交差した飾り木

② 鯉木とは、神社・宮殿の棟木（おなぎ）の上に、棟木と直角に横たえられた丸太。形が鯉節に似ている。
※ 俗説では、奇数は男神、偶数は女神

長幡部神社 常陸太田市幡町 ※ 延喜式内社 由緒 (6~7 ページ)

創始年：第10代崇神天皇の時代に長幡部^{こおり}の祖である多豆命が美濃より久慈郡に移る。

御祭神：綺日女命(かむはたひめの みこと)・多豆命(たての みこと)

※1. 御服(みけし) 貴人(ににぎのみこと)のお召し物 祭祀に関する織物

2. 崇神天皇 第10代・年代不詳(享年：日本書紀119歳、古事記168歳)。実在性が高いとの説あり、3世紀後半から4世紀前半頃か。

3. 神調(みつき) 延喜式によると、常陸の国から上納する調(特産物を納税)は、長幡部^{あしぎぬ} 純七^{しづ} 疋、倭文布^{ふとぎぬ} 三一端とある。(一疋とは2反、端=反)。純とは、太絹とも呼ばれ折り目の荒い絹。

4. 部の民 (1ページ・国造と部について)

5. 延喜式内社 (7ページ4行目から)

6. 長幡 一説によれば機織機^{はた}の長さが他より長いからとも。

7. 古墳群 幡台地一帯の古墳群は、古墳時代の一族のものと考えられている。

8. 布の原料 麻、からむし、こうぞ等の植物繊維をより合わせて糸を作った。麻布は縄文晩期の土器片に麻布痕が残っているのが見られる。

△奥会津昭和村では今でもからむし織が生産されている。

○養蚕・絹糸製糸技術は縄文早期～弥生初期に中国から伝来した。

参 考

天之志良波神社 常陸太田市白羽町 ※ 延喜式内社

創始年：延暦14年(795)坂上田村麿東征の際に社を建立したという伝説がある。

御祭神：天白羽命(あめのしらほの みこと) 麻を植えて織物を広めた神。白羽は麻で織った

神祭りの為の衣服。 祭祀に関する織物

△天白羽命は、天照大神が天岩戸に隠れた時、麻で幣、大玉串を作り、天太玉命^{ふとたま}がこれを捧げ持ち、^{た ちからをの}天手力雄命が岩戸を引き開けたとの物語に出てくる。『古語拾遺』

静神社 那珂市静 ※ 延喜式内社(古代は久慈郡に属していた)

創始年：大同元年(806)他の多くの神社に同じ。

御祭神：建葉槌命(たけはつちの みこと)・天手力雄命

△倭文^{しづ}の織物-静織^{しどり}の里 倭文部^{しどりべ}の人々が織る一畿内などでも。 祭祀に関する織物

奈良・平安時代には、倭文布は上品で貴重な、綾の一種で模様のある織物と伝わる。

○長幡部、天之志良波、静の3社とも祭祀に関する織物で久慈郡の近隣に集まっている。

5 幡館跡

中世の居館跡。東側には土塁が残っている。長幡部神社一帯は明神森といわれており、この森の南端部に館跡がある。この居館には諸説がありはっきりしていない。

- ① 機織を業とする長幡部の一族の居館
- ② 戦国期の佐竹家臣「幡氏」に関連する館
- ③ 社殿後ろには倉跡がある。
おしぐら
(御稗倉と呼ばれている)それに関連する館



幡館跡付近

参考資料：『常陸太田市史』『常陸太田市史余談百話集』より

【参考：幡城址（館址）】

城址（館址）は常陸太田市の東約1km里川左岸の幡台地南端の長幡部神座の南側が城（館址）であるが、現在畑である。佐竹氏家臣幡氏の館と伝えられているが、詳細は不明である。南北約70m東西約50mの規模の広さがあり、東側には土塁と北側には堀跡が残り、北側以外には帯曲輪が確認できるが遺構は不明瞭である。

